「自由」の中で自ら鍛える
自己実現のための英語力とは

世界で勝負する英語には「技能」の先にある「感覚」が求められる

プリンストン大学 進化生態学部博士課程
羽場 優紀 さん
（2010年12月まで平岡塾に在籍）

Photo: Sameer A. Khan

2015年に東京大学を卒業後、米国コロンビア大学大学院で修士号、最優秀修士論文賞（Alfred Russel Wallace Prize）を獲得。プリンストン・ハーバード・コロンビアなど複数の大学院博士課程から最優秀の成績でオファーを受け、現在はプリンストン大学大学院で遺伝学・脳科学・進化生態学の研究を行っている羽場優紀さん。中高時代のどんな学びが今の研究を支えているのか伺いました。

自らの研究テーマを追究し渡米を決意

――羽場さんはコロンビア大学大学院の修士課程を経て、現在はプリンストン大学大学院で博士課程の講義を受けながら研究をされています。そもそも、なぜ日本ではなく、アメリカの大学院に進む道を選ばれたのでしょうか。

私の希望する分野の研究ができる大学院が、東大をはじめとする日本の大学にはなかったためです。

――その研究とは？

私が生涯をかけて研究したいテーマは、「人間の思考はなぜ生まれ、どのような仕組みで動いているのか」という謎の解明です。私は子どもの頃から、何が生物の行動を決めているのかに興味を持っていました。これは進化学や生態学といったマクロの行動を解析する学問分野に相当します。その後、大学で遺伝学や神経科学といった生体メカニズムを明らかにする学問を学ぶうちに、生物がその行動に至るまでに、どんな遺伝子が関わっていて、どんな脳の構造が最終的にそのような行動を発現させているのか、といったミクロの分野にも興味が広がってきました。そこで、ミクロ・マクロの両分野を包括する視点から、生物の行動の起源を解明したいと考えるようになりました。

しかし、当時の日本にはミクロとマクロ両方の分野の視点を持った研究機関がほとんどなく、既存の学問の壁を超えた研究を行うのが難しいと感じたため、新たな研究の場を求めて渡米することにしました。こうしたボーダーレスな研究に挑戦する以上、これからもさまざまな領域の学問に興味を持って、アメリカや日本のみならず、世界中の研究者と協働しながら、わくわくするような研究を楽しんで進めていきたいと考えています。

ただ「大学受験のため」でなく「学ぶ楽しさ」を求めて平岡塾へ

――米国の大学院に行くには、やはり英語力が必須です。どのように身につけたのでしょうか。

中学生の頃は、ずば抜けて英語ができたわけではありません。転機となったのは、高1から通い始めた平岡塾。それまでは、中学に入学すると同時になんとなく入った塾に通っていたのですが、そこは大学受験のための授業ばかりで、学ぶ楽しさが感じられず、自分には合わないように思いました。私はやりたくないことには身が入らない性格なので、成績も伸びませんでした。「このままでは伸び悩んでしまう」と危機感を感じた私は、高1になるときに、それまで通っていた塾を他教科も含めすべて変えることにしました。

友人の話を参考にいろいろな塾を見学しましたが、英語で一番面白そうだったのが平岡塾でした。平岡塾では受験に特化せず、"英語そのもの"を学ぶことができる点に惹かれたのです。また、自分自身で「基礎が抜けているな」と感じていたので、初めの一歩から教えてくれるというのも、平岡塾を選んだ理由の一つでした。平岡塾には中学生から通っている生徒もたくさんいますが、私が入ったのは高1から通う生徒向けの「新高1クラス」でした。このクラスでは、中学ですでに学んだことを前提とせずに、すべて1から学び直します。中1から5年間かけて習得することを高1・2の2年間で学ぶほか、授業ごとに文法・読解・英作文の宿題が出るので、かなり大変でした。でも、「英語は言葉だから、何をするにも役に立つはず。学んで損のない科目だから、大変でもきちんとやろう」と思っていました。

平岡塾独自のセレクトによる教材。ラッセル、オーウェルなど、古典的名著の名文が中心となる。

「現代風寺子屋」ともいえる授業スタイルと、自由かつアカデミックな校風で知られる。

Photo: Sameer A. Khan

[左上]プリンストン大学の博士課程同期と。世界中から集まった優秀な仲間と切磋琢磨できるのが一番のモチベーションだという。
[左下]コロンビア大学にて、修士号と最優秀修士論文賞を授与される。
[右下]同じくコロンビア大学にて、以前の指導教官に招待されたパーティーでのスピーチの様子。

非ネイティブだからこそネイティブ以上の英語力を身につけることができる

――平岡塾で学んだことで、いま何が一番役に立っていますか。

文法を非常に重視しながらも、その先にある"英語の心"のような部分まで教わったことです。たとえば、ある先生は「副詞をただの"お飾り"と考えてない？ 副詞はサッカーで言えばボランチだよ。文というピッチの中で縦横無尽に動いて、あらゆる相手にパス出しできるのは副詞だけだ」と教えてくれましたが、これは英語を母国語とする人が言葉を使うときの感覚にとても近いのです。

アメリカでは、大学教授をはじめとするネイティブ（母語話者）の人たちに、「君はなぜそんなに英語が上手いのか」と言われました。発音も平岡塾のネイティブ講師による授業で鍛えられましたが、私の英語を本当に上手いと感じるなら、それは何よりも私が英語独特の「間」や「表現」を掴んで話せているからでしょう。非ネイティブだからこそ、ネイティブが無意識に用いている文法構造を論理的に突き詰めて学ぶことで、「間」や「表現」に対する感覚も研ぎ澄まされ、ネイティブ以上に英語の全体像をつかむことができます。英語の構造を精緻にとらえた上で、さらに感受性や好奇心をもって、自分と異なる相手を文化的・感覚的に理解しようとする姿勢を常に持つことが大切だと感じています。

――コロンビア大学大学院では、最優秀修士論文賞に選ばれたそうですね。

13人の同級生は私以外、全員がアメリカ人でした。外国人である自分がネイティブの人たちを抑えてトップになったということは、英語力でも母語話者と遜色なく、研究の内容で勝負できたということだと自負しています。

国際社会では、論理的に物事を伝えるために、論文やレポートなどの文章をパラグラフ・ライティングの技法で書きます。欧米諸国の学生であれば当たり前のように指導される文章の書き方ですが、日本人のほとんどは、このパラグラフ・ライティングを知りません。平岡塾では、高3になるとパラグラフ・ライティングやエッセイ・ライティングの訓練をしますから、しっかりとした論理構成で文章を書く力が自然と身に付いていたのだと思います。

言葉に研究への熱意を乗せて相手を感動させられるか

――博士課程に出願した際は、プリンストン大学、コロンビア大学などで首席、ハーバード大学もトップ3名の1人として、これらすべての大学から奨学金付きで合格のオファーをもらったそうですね。その他にケンブリッジ大学、ロックフェラー大学にも合格したと聞いています。そのためには、書類審査だけでなく、面接試験でも高い評価を得なければならないわけですが、それは、どれくらい大変なことなのでしょうか。

イギリスの大学では博士課程に奨学金は出ないのですが、アメリカでは一流大学の博士課程にトップ合格すると、フェローとして招かれ、学費は免除、さらに数百万円の奨学金付きで研究ができます。その分、選ばれるのは大変で、世界中から何千人、何万人とくる応募者の中から、教授からの推薦状や英語力のスコア、自分のしたい研究についてのエッセイといった書類審査で、まず30人ほどに絞られます。その後、各大学に招待され、教授や研究者などと会って何日も話し合い、総合的な人間力を判断された上で合格が決まるのです。そのプロセスは、持てる英語力を総動員して自分の興味を相手に伝えられるかどうかの戦いです。自分の研究への思いで相手を感動させなければならないのですから、当然、受験英語では太刀打ちできません。それを可能にしてくれた平岡塾の英語教育には本当に感謝しています。世界をフィールドにできる水準の英語力が培われたのはもちろん、外国の文化そのものを深く学ぶように導いてもらいましたから。

――最後に、中高生にメッセージをお願いします。

麻布中高時代はサッカー部に所属し、部活にのめり込んでいました。好きなジャンルの音楽バンドもやったし、生物の行動にも興味を持った。そんなふうに自分の好奇心に素直に生きてきたので、自分の好きなことだけでなく、嫌いなことを知ることができました。そのことが、後に自分の本当にやりたいことを「やる」か「やらない」かの決断を迫られたとき、「やる」と覚悟を決めて選べる素地になったのです。中高生の皆さんも、素直な心で夢を見つけてください。